





カクレキリシタンの空き家から見つかったマリア観音像。
外海潜伏キリシタン文化資料館所蔵。

制作の動機

2020年のパンデミック以降、海外へ渡航することや旅への不自由さを感じていた。

2021年10月、いつかの緩和のタイミングに、長崎県の五島の島々を巡った。2018年にキリシタン関連の遺産が世界文化遺産に登録されてからは、初めて訪れる。福江島、奈留島、久賀島、上五島のキリシタン教会などを訪問し、自然のエレメントや島民の方々の優しさに触れる。

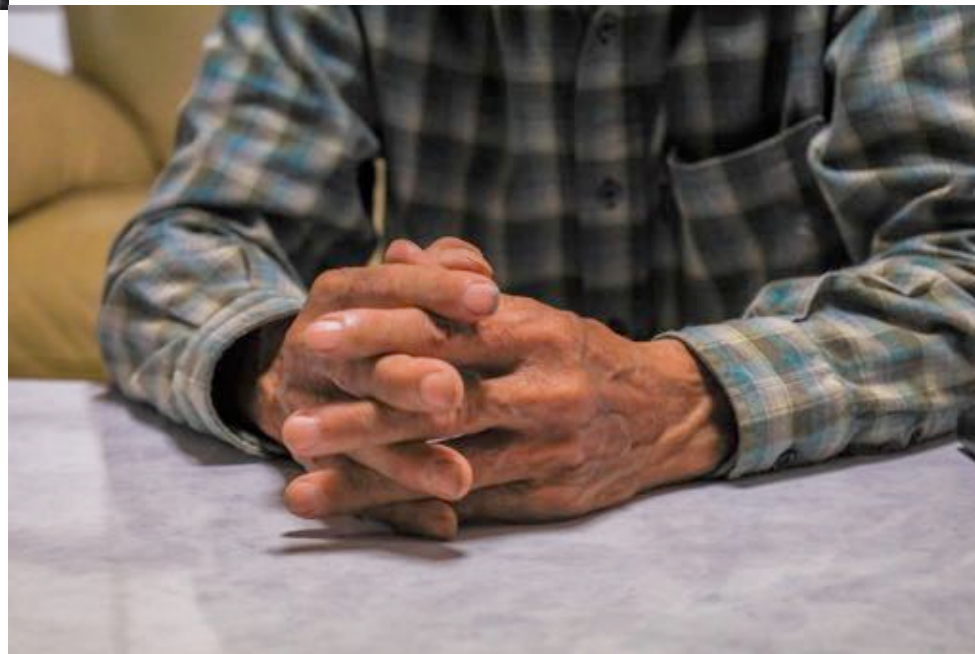
2022年10月には、外海地区を訪れた。再訪問の目的は、空き家から見つかったカクレキリシタンが所有していたマリア観音像と対面するためだった。黒崎教会近くの外海潜伏キリシタン文化資料館へと向かい、カクレキリシタンの末裔の松川氏に会う。3日間の短い滞在で、カトリックの教会やキリシタン伝道師が潜伏した屋敷跡、集落などを廻った。そして、カクレキリシタンにお会いすることが出来た。祈りの言葉である“オラショ”に心が打たれた。

正しい信仰心とは何か、祈りとは何か。

今は実家からは離れて生活しているが、毎朝決まって、母が般若心経を唱えていたことを思い出す。それは、カクレキリシタンの独自の信仰心と重なるものを感じる。私は長崎の旅から、意味深い繋がりを感じずにはいられなくなり、作品として発表したいと強く思った。



外海潜伏キリシタン文化資料館の松川氏が案内してくれた、隠れてオラショを練習した岩。枯松神社の敷地内にある。



下黒崎に住む、カクレキリシタン帳方7代目の村上氏のご自宅で、お話を伺う。



上五島若松港から船をチャーターして、洞窟へ向かう。迫害を逃れるために潜伏キリシタンの3人が身を潜めて暮らしていた場所。

(右上) 自然の荒波によって空いた穴は、「ハリノメンド」と呼ばれ、マリア様が子を抱いている聖母子像のシルエットに見えると言われている。2021年に訪問。

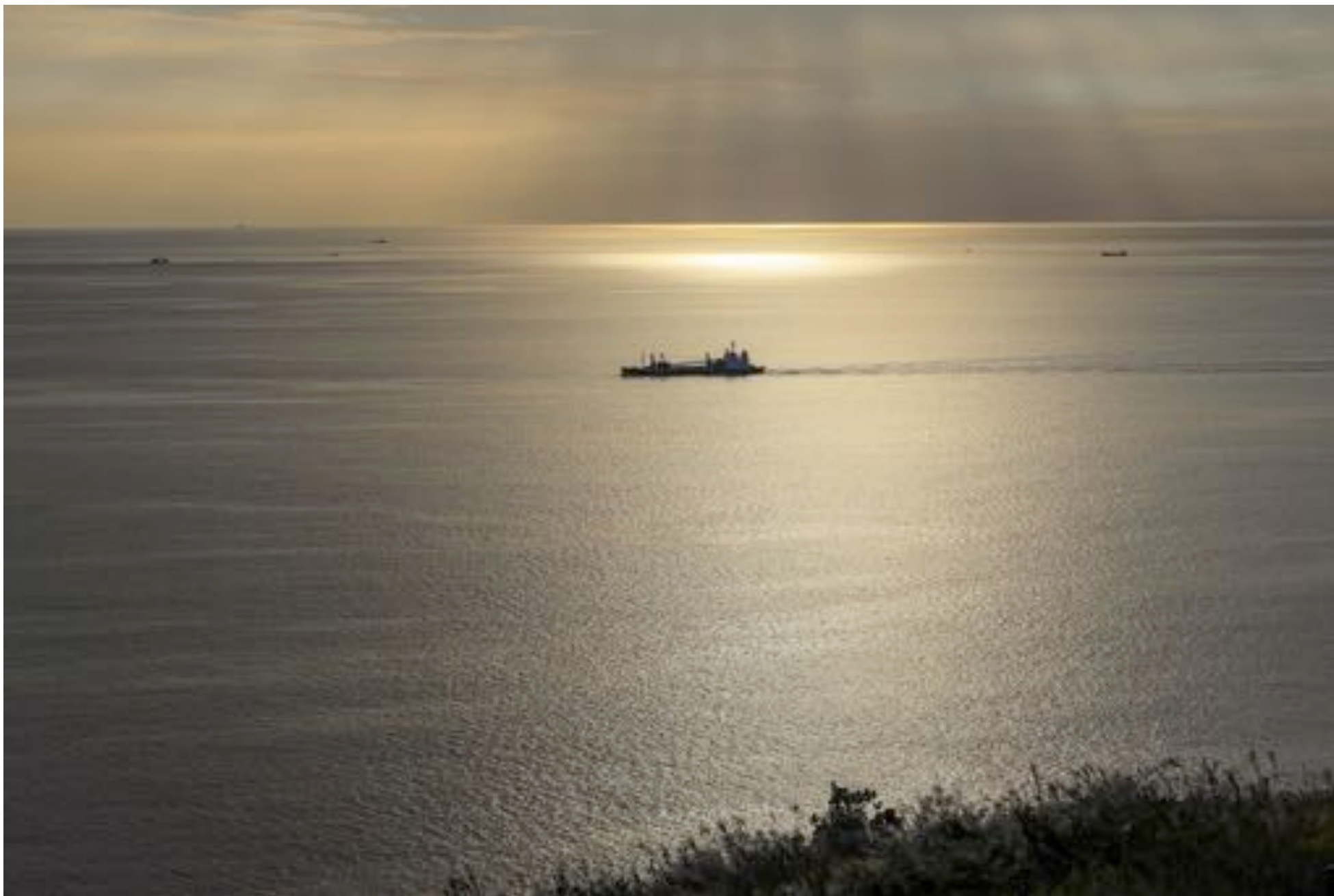
クリシタン伝道師バスチャンの屋敷跡への道のり。バスチャン伝道師は、密告により拷問を受けたと言われている。



出津のクリシタンの里の集落。10月の風景。



下黒崎に住むカクレキリシタン7代目の帳方、村上氏のご自宅にて。ご先祖さまのお仏壇がある前にて撮影。



五島灘に面する西彼杵郡の外海町、現在では長崎市。暮れていく夕日を眺める。

テーマ説明

「Hidden Christian Story」

カクレキリシタン（Hidden Christian）とは、キリシタン時代にキリスト教に改定した子孫であり、信仰の自由が認められた現代でも、教会には通わず、自宅で信仰を行った人を示す。それは、潜伏時代から受け継いできた祖先の教えを守り続けている。外海地区の黒崎では、「旧キリシタン」と名乗る。

五島灘に面した外海町（現在は長崎市）は、かつて最初のキリシタン大名となった大村純忠の領内にある。江戸幕府の時代にはキリシタン信仰の禁止令が発令されて、弾圧時代のキリシタンは、信仰が見つかりと拷問を受ける。潜伏キリシタンは、サンタ・マリア像など神の姿をした仏像を所有し、そのマリア観音像に向かって隠れて密かに自宅で拝む。現在は、カトリック、プロテスタント、仏教を信仰している住民もいるが、祖先を受け継ぐものは、今でもカクレキリシタンの独自の信仰心を引き継いでいる。コロナ禍での長崎の旅は、カクレキリシタンの出会いと遭遇する奇跡の旅でもあった。下黒崎に住む村上氏は、先祖の代を受け継ぐ。心の支えとなるのが、独自の信仰心であると語ってくれた。

2021年に訪問したキリシタンが潜伏していたという洞窟、伝道師バスチャンが潜伏していた屋敷、隠れてオラショの祈りの練習をした枯松神社の境内にある大きな岩の存在。外海地区に住む住民の方々の話を聞き、その場所へ連れて行って頂きながら、沢山の出来事を写真に記録した。人々との出会いや風景との出会いを通じて、信仰心や自由や平和について考える貴重な時間であった。

現在、カクレキリシタンの祖先は、伝承する世帯が少なくなり減少傾向にある。

今は隠れる必要はないが、キリシタンが存在する集落は静かで青い海を見渡すことが出来る。その信仰を大切に守り続けようとする子孫の思いに心が動かされる。しかし、この場所は時が止まっているようで平穩に時は過ぎていくだけなのかもしれないが。



叶野 千晶

Kano Chiaki

1971年千葉県生まれ 東京在住

Web Site : <https://www.chiakikano.art/>

京都造形芸術大学 通信教育部芸術学部 美術科写真コース卒業。

在学前の15年余りは単身で国内外13カ国以上を旅しながら写真を撮る。在学中、助成金制度の補助を受けてポーランドの收容所に訪問し撮影、個展の情報が朝日新聞に掲載される。卒業後は、千住博学長の勧めで、軽井沢で水と光のエレメントを主題とした個展を開催する。その後、写真プロジェクトや企画などで作品を撮り下ろし発表をする。現在、歴史や史実をリサーチした作品制作を継続しながら、国内外で作品を販売、発表活動を行う。International Association of Visual Artist Italy member、同大学の非常勤講師を担当。

〈主な個展〉「AUSCHWITZ-“portrait”, “camp”～存在と不在～」三鷹市芸術文化センター, 東京(2010), 「永遠なるもの something eternal」軽井沢ニューアートミュージアム, 長野(2015), 「Shower room」五条坂京焼登り窯, 京都 KG+2019 KYOTOGRAPHIE SATELLITE EVENT (2019), 「Water Scape」space 2*3, 東京(2021), 「WALL-SCAPE」GALERIE PARIS, 横浜(2021) 他。

〈主なグループ展〉「風景のかたちー前田真三と現代日本の風景写真」足利市立美術館, 栃木(2016), 「GSS Photo Award 受賞者展」富士フィルムフォトサロン(2017), 「Two Mountains Project 2017」ESPACE KUU, 東京(2017), 「東京好奇心 2020 渋谷」Bunkamura ザ・ミュージアム, 東京(2020), 「PARA[SO] M.A.D.S Gallery Milano ITALY (2021), 「コンテンポラリーアートフェア ルクセンブルグ 2022」(2022), コラボレーション展「CROSS PATHS」MONAT Gallery Madrid, Spain (2022), 「WE CONTEMPORARY」MUSA International Roma, Italy (2022) 他。

〈受賞歴〉第六回 松蔭芸術賞 受賞(2014), 第3回 GSS Photo Award グランプリ受賞「ラーゲルの記憶」(2017)

〈所蔵〉足利市立美術館